



質問コーナー

火をおこしたいのですが……

—— 原始時代の火をおこすときのポイントはどんなところですか ——

答 森下一期(職業訓練大学校)

質問コーナーとしては大きすぎる問題で、簡単には答えられません。ですから、原始時代の発火法を専門に研究し、また、その方法を広く普及されている岩城正夫先生の著書を紹介することが、最も適切な答かもしれません。岩城先生の著書は数多くありますが、手もとにあるもので見ると次のものが参考になるでしょう。

『原始時代の火』 新生出版

『原始人の技術にいどむ』 大月書店

『原始時代の発明発見物語』 国土社

ごく最近、火のおこし方を非常に詳しく説明した『火をつくる』(大月書店、シリーズ子どもとつくる②)が出版されました。誰でもできることをめざしてつくられた本、ということですので、種々の疑問点は、これで解消されると思います。

しかし、本の紹介だけではあまりに味気ないので、上記の書物で学び、6月に行われた手労研東京児童サークルの講座での岩城先生の話に学びつつ 私自身が経験してきたことの中から、いくつか述べておきましょう。

① 木や竹の摩擦によって出てくる粉をためる必要がある——摩擦熱を貯えて、火種としなければならぬ。……木を強くこすり合わせれば、すぐ煙が出ます。しかし、発火の温度には達しません。まだ、岩城先生の本が出ない頃、どうしても発火しないため、電動の大きなドリル(ボール盤)に丸棒をとりつけ、勢いよく回して摩擦させたのですが、けむりと、コゲクズが出るだけで一向に発火しませんでした。摩擦させる個所にV字型の切り込みを入れて、コゲクズがたまるように

しなければいけなかったのです。うまくたまって、熱がにげないと発火するのです。

② 木は乾燥しているものを。……岩城先生によれば、どんな木でも発火するとのこと。また、湿っているものは、最初のうちの摩擦で乾燥させると発火させることができることを見せてくれます。でも、私たちは素人ですから、1年間ぐらい(二・三ヶ月でもよいですが)室内に置いていたものを使うとよいでしょう。私の経験では、梅雨どきに生徒を目の前にして、汗みどろになって、弓ぎり式による火おこしをしたのですが、五・六回も失敗し、もうこれで最後というときに、火種ができたこともあります。はじめてやるときには、冬など、乾燥しているときがよいと思います。

③ 今回の講座で、手によるもみぎり式で発火させることができました。基本を学んでやってみれば、無理かな、と思ったこともできるようです。

④ やはり装置は大切です。紙数の関係で作り方までふれるわけにはいきません。上記の参考書を見て下さい。

⑤ 火種ができて、それを炎にするのが次の大切な段階です。一番てっとり早いのは経木に硫黄をぬりつけたものを使うことです。そうでないときは、燃えやすいヤシの毛などに点火させるようです。そういったものもないときは、乾燥した燃えやすいもの(チリ紙でもよい)を底に穴をあけた罐に、火種とともに入れて、下から吹き上げると炎上がります。これは立川の児童館の人々が試みたことですが、簡単な方法を求めるだけでなく、自から苦勞して求めていきたいものです——何しろ原始時代の火なのですから。